

## <ミミオ図書館 in 女川 司書ボランティア参加感想>

前回と同じ企画に今回も参加でき、とても良かったと思っています。活動内容がほぼ一緒でも、場所や人が変わり、ミミオ図書館の変化や成長を体験する事が出来ました。

また前回と同じ場所へ宿泊した事で、季節や時間の経過も体験できました。気候もちょうど良く、桜も散って、青もみじや新緑で山が黄緑色で綺麗でした。旬の海の幸(メロカマ、銀ムツ、ホヤ、クジラetc)も堪能できました。ホテルも改装され綺麗になっていましたが、地震でエレベーターが止まったときに利用した階段の壁には今までの地震のダメージが残されており、生々しかったです。

女川の仮設住宅に向かうバスの中で、窓の外を見ながら、同じ海岸沿いでも津波のダメージが見られない所、本当に何もない所の違いが物凄く何とも言えない気持ちになりました。

女川でのミミオ図書館は、石巻の古い図書館の懐かしい感じとは違い、新しい建物でしたので、これから出発していく雰囲気を感じました。子供たちが日常的に遊んだり、お年寄りが集まる場所に私たちがお邪魔をし、遊んだり、話を聞いたりしたことが、図書館を訪れた人達の普段とは一味違う楽しい時間になっていたと思います。

子供に読み聞かせをするのは初めての経験でしたが、読み聞かせというよりも、小さい子の中には覚えたばかりの字を読みたいらしく、一緒に朗読しました。濁音や半濁音が苦手と教えてくれました。また、間違い探しのパズルやゲーム要素のある本は皆でワイワイ交流しながら進むことが出来、良いなあと思いました。本気で子供達と競争しました。

隙を見ては日食の話振っていましたが、女川では金環日食にならないことに皆がっかりしていました。持参した日食グラスもフル活用しましたが、外は雨で室内では真っ暗にしか見えないグラスでは、吸引力はいまいちでした。寄贈したので、当日も使ってくれることに期待しています。

ほぼ一日子供たちの遊び相手と話し相手になっていましたが、小さな子達がさらに小さな子達の面倒を良く見ていて、なにかいさかいがあったら皆でフォローしあっている姿が印象的でした。特に女の子達に感じましたが、小さな社会性があり、問題が起これば皆でサポートしあいながらも、無理やり解決しようとはせずに、時間を置いたりして徐々に溝を埋めていました。

普段小さい子の面倒を見ているせいか、少し年長の子は年上の人と話したらしく、司書の仕事を手伝ってくれながら、色んな話を聞かせてくれました。「タクシー会社は、一番海岸側にあって、一番先に水をかぶったんだ、でも大丈夫みたいだったんだね。その次にあった建

物の人は皆だめだったんだよ。屋上まで水が来たから。だから今来ている人たちは皆新しい人達。」

先日の大雨に会った友達の体験談や、新しいお店、お昼ご飯や、好きなタイプの男の子の話をしている中で、さらっと出てきた話題でしたが強烈なインパクトがあり、今回一番忘れられない話になりました。自分の子供時代と比較して、なんて違った日常を生活しているのかと思いました。

ミミオぬいぐるみは、子供達に大人気でした。ハグジャパンのミミオマークは絵本のミミオと何かちがう！と言っていて子供は鋭いなと思いました。最終日に登場した鴻池さんはミミオの作者だよ、と教えてあげたら「スゴイ！」と、びっくりしていました。絵を欲しがると子供もいてファンが増えてうれしかったです。

ミミオ図書館はサーカスのように巡業して行きたいと聞きましたが、本当にミミオ団として各地を回って行き、今後も末永くお手伝いして行けたらと思っています。微々たる事ですが、今回会った子供達との体験を忘れずに、尽くして行きたいと思います。今回も機会を頂き本当にありがとうございました。

(本多麻美)

---

私は今回はじめて震災後の東北に行きました。石巻から女川までの代行バスからの景色は、途中普通に家も建っていましたが、とある場所から突然、まさにバスの中の全員が言葉を失いました。瓦礫はどけられているものの、辺り一帯本当に何もなくて、残っていた建物もよく見ると横に倒れたままになっており、それまで楽しそうにしゃべっていたバスの中の人たちもただただ黙ってしまっていました。

でもミミオ図書館についてみると、楽しそうに遊ぶ子ども達がいっぱいいました。行くまでは私には何ができるのかよくわからず、不安の方が大きかったのですが、逆に子供たちが一緒に遊んでくれる、といった感じで一日はあっという間に過ぎました。2日目の朝、タクシーで行った石巻の海沿いも1年たったとは思えない光景でした。日和山神社の上から見たときも、確かに何も無いのは見えていましたが、近くに行くと全然違いました。

図書館では手芸好きで様々な作品を作るおばあちゃんと近くの山をお散歩しました。童謡などで聴いたことはあったのですが、実際のあけびの実を見るのは初めてでした。おばあちゃんは仮設に入れるまでに8カ月以上かかったとお話してくださいました。全て流されてしまった

ので今までやっていたホタテの養殖のお仕事は今はなく、手芸作品を作っていることを、明るく話していました。夕方からは前日のように学校が終わった子ども達がたくさん来てくれました。

図書館から食堂へ行くために女川の地域医療センターまで歩いたのですが、そこから見える山と山の間からキラキラ光る海は本当に綺麗でした。図書館に来てくれる人達はみんな明るく、かえて私が楽しませてもらった感じでした。

帰ってきてからは、もっと今の私でもできることをちゃんと考えないといけないな、と改めて感じました。これからは機会があればこういった活動に参加したいと考えています。

(高堂典子)

---

「行ってよかったな」と、とても思います。

どんなよくまとまったレポートを読むより、どんなリアルなドキュメンタリー映像をみるより、“その場所に身を置くこと”“直接耳を傾けること”でわかることがたくさんあるのだと改めて実感しました。

絵本や映像、ミミオちゃんやワークショップが会話のきっかけになり、花が咲くように会話が弾んでとても楽しかったです。毎日のように来てくれる人もいて、居心地良く人が集う場所を作ることになったのではないのでしょうか。

「遠いところ来てくれてありがとう」とお菓子や手作りの小物をくださったり、あたたかく迎えてくださった現地のみなさまに感謝の気持ちでいっぱいです。

課題としてはどうも「こども向けの」というイメージを持たれがちで、なかなか（本当は好きなくせに？）大人は絵本に手を伸ばしてくれないところでしょうか。

(大橋さと子)

---

前回の石巻に続いての参加でしたが、今回はまったく違う体験でした。

ふだん子供たちが遊び場になっている仮設住宅のなかの集会場を図書館にしているので、学校帰りに子供たちが立ち寄ってくれて、さながらミミオ児童館のようでした。子供たちとオセロ

や将棋をして、その合間に絵本をすすめてみたりしましたが、ちょうど絵本のなかの家を作ってみるというワークショップをやっているときだったので、子供たちは絵本をちょっと見たあとにそちらの方に行ってしまう、それが少し残念でした。工作やお絵かきのあとに絵本に戻ってきてもらえる工夫がなにかできればよかったです。

映像を上映しているキッチンシアターも男の子たちの秘密基地的な溜まり場になっていたのですが、時折聞こえてくる声を聞くと「ミミオがんばれ！」と叫びたりして、ちゃんと見てくれてもいるのだなと思いました。

面白かったのが、ミミオのぬいぐるみに子供たちが目や口をつけていくことでした。それぞれ自分の思うミミオの顔というものがあるらしく、だれかがつけると「それは違う！」と言って自分の作った目や口を貼り直していたりしました。(館長の許可がおりれば、子供たちとミミオの絵本を読んだり、映像を見たあとに、それぞれが思い思いのミミオの顔を描くというワークショップをしてもいいのではと思いました)

短い滞在でしたが、前回よりも来て下さった方々と生活の中でお話ができた気がしました。今後もしできる限り通ってみたいと思っています。

(まい)

---

今回ボランティアに参加して印象的だったことを3つ挙げる。1つ目は、整備された女川の仮設住宅と住人、住人に対するケアである。去年、名取市文化会館で、避難されている人に対してエンターテイメントを届けるボランティアに参加したが、その時に接した子供達は大変に感情的、攻撃的でストレスを溜め込んでいることが直ぐに伝わって来た。一方、今回接した子供達は、ちょっとしたことで泣き出す子も、ぶったり蹴ったりしてくる子もおらず、人の話をちゃんと聞くことができる子供が多かったし、服装や持ち物がオシャレな子供もたくさんいた。女川市の職員の方が相手のお名前を呼んでからお話されているのも印象的だった。女川の仮設住宅は、建築家の坂茂さんが、少ない資源と土地を生かして最大限の心地よい生活が送れるように考案されたそうだが、十分ではないのかもしれないが、居住環境が整うことで、親も子も心にゆとりが出来てきたのだと実感した。

2つ目に印象深かったことは、ミミオ図書館で知り合った女性との会話である。この女性は

東京で働きながら、祖母が住む女川に通ううちに石巻 2.0 の活動に加わったそうだが、私が石巻市内を歩いた感想を語ったところ、被災地にも普通の生活が流れているのだと指摘されたことだ。子供達は学校に通うし、結婚するカップルもいれば、夜遊びを楽しむ大人達もいる。私にとって被災地はどこか特殊な場所だという想いがあったのだろう。「被災地」という響きは確かに特別な場所を思わせるが、そこには日々生活を営む人がいて、着実に住人達が日常を築いている。被災地という言葉に対するイメージがいかに自分の中で一人歩きしていたかを思い知った。

3つ目は、石巻のコンビニでレジ打ちをしていた青年との会話だ。鶴の湯という銭湯で一風呂浴びた帰りに立ち寄ったコンビニで、レジにいた店員に時代屋と復興バーのことを聞いてみたところ、知らないと言われたことだ。東京で石巻でのボランティア活動について調べると必ず名前が上がっていた二軒だったので、驚いてしまったが、当然様々な住人がいるわけで、東京で得た数少ない情報を当然のことのように思ってしまったことに反省した。

今回ボランティアに参加したことをきっかけに、仙台、名取、石巻、女川を自分の足で歩き、そこで生活する人々と出会うことができた。メディアでは取り上げられないいくつものストーリーがあることを知った。何より、出会った人がみな気持のよい人ばかりだった。閉館時間を過ぎても入れてくれた鶴の湯のおばちゃん、バスに乗り遅れてしまった私たちを見かねて、駅まで特別に載せて行ってくれた市民バスの運転手さん、偶然開かれることになった焼き肉パーティに招いてくれた IRORI の皆様、人の家の新聞を間違えて読んでしまったのに優しく接してくれたかめ七のおじいさま、買って来たばかりのお菓子をどんどん分けてくれるおばあさん。挙げれば切りがない。これらの出会いを胸に潜め、これからも1年に1度くらいは東北の地を訪ねられたらと思う。

(三上真理子)

---

訪れてくれた子どもたちは、自由に本を手にとってくれました。年齢によっても違うのですが「読んで」と持ってくる本や、自分で広げているものに関しては、ちびまるこちゃんといったアニメや、音の出る絵本などが主だったように思います。たくさんの読んで欲しい絵本がある中、ちょっともったいないな、と感じました。集会所というスペースだったこともあるでしょうが、貸出にできたら家でじっくりと絵本と向き合う子どももいたのでは、と思います。

子どもたちは普通に「カセツ」という言葉を口にしていました。一年ちょっと前までは巡り合うはずもなかった言葉でしょう。大人になった時「カセツ」と「絵本」をセットで思い浮かべることができたなら、つらい記憶も少しは和らぐかもしれないと思いました。焚き火や6本足のオオカミに乗ってやってくるものがある。本にできる最大のことですね。

(柴田夏子)

---

私は2日間参加しましたが、両日とも子どもの来場者が多かったです。

工作のワークショップをやっていて、司書というより子どもたちと一緒に工作をする、工作の人のようになっていました。工作の他には、ボードゲームなどでもたくさん遊びました。ダンスをしたり、プロレスをしたりもしました。

どのように接したらいいのかというのを考えていたのですが、子どもたちが自然に絡んでくれたので、こちらも自然に絡むことができました。結果、特に被災地の子どもたちと遊んでいるということを意識しませんでした。それは、ミミオ図書館という企画に参加した意義を見失っているのちに反省しました。でも、楽しそうだったからいいかな？とも思っています。

2日目は街の様子を見に行きました。まず、がれきの山が続く道を歩きました。遠目で見ていける分には、がれきはゴミの山にしか見えていませんでしたが、道を歩きながらがれきに目を凝らすと、ひとつひとつのものがよく見えました。これらはゴミではなく、さっきまで遊んでいた子どもたちがかつて持っていたものだと思います。

ただ子どもと遊んだだけの2日間でしたが、子どもたちが楽しんでくれて、これから何かを得るためのエネルギーになってくれるといいなと思いました。

次回参加するときには、司書として絵本からそのエネルギーを吸収する助けをしたいです。

(新田桂子)

---

バスの移動時に目撃した女川の光景は、「まち」があったという想像もできない「更地」でした。「まち」のかたちはなく、初めて訪れた者にとっては、昔からそうであったようにしか思えません。石巻で日和山から下ったときのように、もっともらしい被災地のイメージをこ

の身で確認できたという変な達成感と、いまここに自分の体があるはずなのに、それを直接受け取ることができないというような感じがありました。その光景からは震災から一年という時間の経過をあまり感じられなかったのも関係しているように思います。

仮設住宅や集会所は、野球場をつぶしたところにありました。集会所に来る方たちの言動はたのしげで日常的であったのですが、女川の光景を見た直後の私にとっては、その差をうまく埋められませんでした。普段なら隠したり抱えたままである人の暗闇の部分をまざまざと見せつけられているようで、それを避けたいのか見ないふりをしていたらいいのか、直接的な当事者でない私にはどう介入していけばいいのか分からず、躊躇してしまいました。人と会話すること、その人と関わること、色々めぐるってしまい、その場を受け止め、たのしくあることが欠けてしまったかもしれません。

そして女川の「後ろにあるもの」も感じました。この狭い敷地に管轄の違うものがいくつもあったこと。女川という小さな町に大きな競技場があったこと。切迫した何かを引き延ばすように、それらは存在していました。女川はまた、原発を抱えてもいます。7月には処理場の増築を始めるようです。何かに挟まれている、その狭間をまざまざと見せられたようでありました。

(上村萌)

---

津波のあとの風景を実際に見たことと、その土地で暮らしていた人が、傍で暮らしを営んでいること（営めるように、さまざまな工夫もされていること）が、帰ってきてからも頭の中でぐちゃりとしながら残っています。仮設住宅に住むひとたちの関係性や、心情、ほんの少し見ただけですが、まだまだできることがありそうだなと、時々女川のことを思い出しながら考えます。生活する環境が大きくかわってしまった場所の人たちと（というと語弊がありそうですが）、ちょうど良い距離で関われる方法がミミオ図書館なのだなと改めて思いました。

ミミオ図書館は子どもたちの遊び場、おばあさんたちのおしゃべり場、外から来た方が腰をおろす場と、「移動図書館+展示」の顔をもちながら、色々なもののハブとして機能しています。現場では、小心者なので、なかなかアクションをとるまでに時間がかかりましたが、もっと腰を据えて滞在すると振る舞いが分かってくるのかな、と思いながら1日半を何とか過ごしたイメージです。

その日のスタッフは4人ほどいたので、近所のおばあさんと（スタッフの高堂さんと）山へ松ぼっくり拾いに行きました。山の上にてきた仮設の集落では小さなコミュニティがあるようで、何かぼっかりとしたものを感じたり、若い方とお話をすると先への視点を感じたり。

自分がまた震災やその後の暮らしについて考え続けていられるようなノビシロを、ミミオ図書館の持つふくよかなつながりの中で受け取りました。

（樋熊冬野）

---

女川へ向かう新幹線の車中で、前日に降った雨のために石巻～渡波間のJRや渡波～女川の代行バスが不通になっている、という連絡をいただく。そのなかで唯一動いていたミヤコーバスは、冠水した交差点を徐行し、通行止めとなった。道路を迂回しつつ、女川運動公園まで送り届けてくれた。震災から14ヶ月経ってもなお、雨後の冠水で交通機関がストップし、道路が寸断される、これが女川の現状なのだと最初に感じた。

女川運動公園に降り立ち、すっと伸びた立ち木の緑に春を感じる。今回のミミオ図書館は、すぐ隣に生活の場がある集会場というスペースで開かれたせいか、住んでいる方々と司書の間にお互いの気おけない、気さくな空気を作り出すことができたのではないかと思う。集会場の前を通る度に、必ず挨拶の言葉をかけてくださる方や、日々遊びにくる子供たち。畳の上で本を読んだり、工作に夢中になったり、お茶を飲んだり、運動したり。

『焚書 World of Wonder』を初めて朗読し、それに合わせ即興で踊ってくださった奥田さんのパフォーマンスに心動かされ（機会があればまたぜひ！）。そして映像を拝見しつつお聞きした、かつての女川の姿。限られてはいたものの、大らかな、豊かな時間を過ごすことができました。女川の皆さま、そしてご一緒した司書の方々、どうもありがとうございました。

\*次回の宿題として、来館される方に対する本への導入についてもっと考えたいというのが反省点です。

（松下幸子）



今回は平日、1日だけの短い時間で、どれだけ地元の人と交流ができるのか少し心配ではありましたが、ところが、前日の打ち合わせの流れで地元ボランティアのバーベキューに混じることができたり、仮設商店街に行く車に便乗させてもらったりといったこともあり、思っていたよりもいろいろな方と話げできました。

私が入った5月1日は平日で、午前中にはあまり人は来ないだろうと思い、仮設住宅周辺を歩いて写真を撮っていたところ、散歩していた83歳のおばあさんと知り合いました。「アイスコーヒーでも飲んでいきませんか」と願ってもない申し出が。お言葉に甘え、仮設住宅に入れてもらって、被災から現在までの経緯をうかがいました。

物が倒れて危うく部屋を出られないところを隣の人に助けられ、なんとか避難できた。ただし家は流され、手元に残ったのは杖一本。しばらく古川在住の娘さんのところに身をよせていたが、古川には話のできる人がいなかったのがつらかった。1か月ほど前によく仮設住宅に入ることができ、友人の多い女川に戻ってこられて精神的にもものすごく楽になった……。明るく社交的な方でしたが、高齢になってからなじみのない土地で暮らすのがどれだけむずかしいか、ということを考えさせられました。

仮設住宅には生活用品はそろっているけれど、あくまでも「最低限」。部屋は6畳プラス3畳ほどのキッチン。居間にはベッドとプラスチックの収納ケース、冷蔵庫、椅子（足が悪いため必需品）とテーブル兼用のコタツ。もともとついていたカーテンは無地の味気ないもので、娘さんが明るい柄のカーテンを買ってきてくれたそうです（偶然なのですが、仮設商店街を訪ねたとき、電気店の奥さんが「ミシンがあったらカーテン縫うのに」とおっしゃっていたのも印象的でした。物資を調達するとき、男性はそうしたところまで発想がいかないです）。

ある程度生活が安定してくると、必需品にプラスして生活のなかのある種の“彩り”のようなものの意味が、結構、重要になってくるのではないか。ミミオ図書館はそうした役割を果たせる存在になるのでは、とも思いました。

また、視察に来ていた別の団体のボランティアの方に、「絵本を送りたいという話はいろいろなところから来るのだが、受け入れ先がない」と相談を受けました。旅する図書館という存在は、かえって収納スペースに縛られないぶん、大きくしていくことができるかもしれません。

午後は子どもたちとかけっこやサッカーをしたりもしました。「司書」であったかどうかは微妙ですが、少しはお役に立てたのではないかと思います。

ご一緒したみなさんにもお世話になりました。また、「こういうアプローチがあるのか」と触発されるところがありました。ありがとうございます。

次回もお手伝いできればと思っております。今後ともよろしく申し上げます。

前回の感想に記した、日和山のふもとの喫茶店も訪れ、マスターと話すことができました。開業52年の店で、建物は無事でも電源系がすべて駄目になり、再オープンできたのはことしに入ってからだそうです。宿題がひとつ片づけられたような気がしました。

(富重雅也)

---

早いもので女川を訪れてからもう半月あまり経ちました。

当日一緒に図書館づくりをしてくださった皆様、前日引き継ぎをしてくださった方、引き継ぎにもかかわらず子供たちと積極的にかかわってくださった次の日の方、そして運営の坂本さん、社会福祉協議会の伊藤さん、ありがとうございました。

私の周囲では、震災まもなくからボランティアにゆく友人知人が多くいました。私も一度は、と思いつつ、行きたい理由を正直に探すと「現地の様子を見てみたい、そこにいる人たちと話してみたい」ということだけ。好奇心だけ？これじゃあボランティアの精神にもとる、そう、二の足を踏んでいました。けれど今回三上さんから「行く？」と声をかけられたときは、一も二もなく「行く！」と答えていました。扱う対象が、本だったからだと思います。

災害にせよ、家の中でのちょっとした居心地の悪さや学校での違和感にせよ、私を助けてくれたのはいつも、本でした。開かないと始まらないもうひとつの世界に支えられて、私は現実のどうしようもなさや悲しい気持ちと折り合ってきました。本を読むこと、本を通じてだったら、被災地の人たちとも気負いなくお話できるかもしれない、そう思いながら東京からの夜行バスに乗り、長い道のりを歩みだしました。

ところがいざ訪れると、現場は想像とは大きく違っていました。まずは図書館の周りの女川の風景。津波で何もかもが失われた場所ときぎ、歩くだけで悲しみでいっぱいになるような場所かと思いきや、そのあまりの何もなさにかえって呆然としてしまいました。日光がさんさんとさしている風景に、なんだか途方にくれてしまいました。この状況について、何か批判や考

えをめぐらすよりも、とにかくこれが現実なんだから、ここからはじめないと。もちろん私が旅人だからかもしれませんが、そんな晴れ晴れしささえ垣間見えたように感じました。

次に、驚いたのは子供たちの元気のよさです。図書館開催前からこの場所は子供の遊び場だったということで、午後には下校した子供たちが一人二人と増え、小さなスペースは20人あまりの子供たちであふれました。引継ぎでいらした次の日の司書さんにも手伝っていただかなければ追いつけないほどの、「見て見て!」「遊んで!」「ゲームしようよ」の洪水。正直なところ、本と静かに向き合う場所づくりを想像していたのだけれど、と面食らい、けれどその間もないほどあちこちでいるんなことが起きていました。子供って本当に大人が好きなんだと感じます。注目してほしいにいらぬはずをしめつけたり、てんで予想通りの動きなんかしないで、外へ出るやら歌うやら。図書館の気持ちのよい空間と、女川の山にはためくこいのぼりを見ながら、近所の公園で見かけた子達と遊ぶときのように、楽しくいっしょに時間を過ごしました。

ただ何度かは、はっとなる瞬間がありました。夕方、二人の女の子に散歩に誘われました。歩いていると、ひよんな調子で一人が言いました。「わたし、自転車乗れなくなっちゃった。震災があってから、なんか乗れないの」。引継ぎの一日目にも、本をめくりながら「これ、私、持ってた」と過去形で語る少女がいました。二人とも、聞いている分には何のひっかけもなく、きのうの夕食の献立についてでも話しているかのような口調でした。子供にとって世界は当たり前なものではない。彼女たちにとっての震災は、明日来る世界も今日と同じと思いついて大人とは違うものなのかもしれない。だからこそ、もっと知りたいと感じました。そして、伊藤さんの話していた、「この仮設住宅でほんの一月前まで、外で遊ぶ子供の声はほとんど聞こえなかった」ということ。目の前の圧倒的な元気さの一枚裏に、震災を体験したときの気持ちがあることに気づき、はっとしました。

私はたまたまそのとき、横浜にいて、ゆれはしたけれど、すぐに職場の仲間と落ち合って励ましあいながら家に帰ることができました。テレビにかじりつきながら募金をして、出来事の大きさに震える余裕がありました。でも、地面がゆらゆらと、頼りないものを感じる感覚はずっと残っていたのかもしれませんが。今回女川での短い滞在を経て、家に着いたとき、ようやく腰をすえて日常のことができるようになった自分に気づきました。自分のために料理をして、落ち着いた気持ちでそれを食べる。被災地も地続きで、それぞれの場所でそれぞれの感じ方がある、と感じたいまだからこそ、なぜか私のほうが女川で英気をもらったようで、感謝の気持ちがしみじみとわきあがってきます。

子供たちにとってミミオ図書館は、一日だけの遠足のように、とおりすぎるひとつの場所、記憶のかなたに忘れられる場所に過ぎないかもしれません。でもそれでよいと私は思います。もっと遠くの、一人ひとりにとってだいじな場所を一人ひとりに見つけてほしいので。関らせてもらった私にとっては、思い返すと心の錨がふっと落ちるような、大切な空間になっています。

(甘夏かな子)

---

私が参加したのは最終日の日曜日でした。この日は子供達の来訪が多く、ほとんどが子供達の遊び相手になっていた気がします。本当に色々遊んだ気がします。

元気の溢れている子供達とサッカーをしたり、肩車や高い高い、将棋やおセロなどもしました。男女混合で何人かいるので、男子と将棋を指していると、いつのまにか女子によじ登られて肩車をさせられていたり、皆のお腹が空くまで元気が渦巻く状態が続きました。

お昼を食べると少しまったりしてきたのか、少し落ち着いた雰囲気です。絵本の好きな子に読み聞かせをしたり、絵本は読まないけどミミオが気になる子にはミミオぬいぐるみの触感を楽しんで貰ったりしました。

また、午後にあるワークショップ「体の外に飛び出そう」の告知のために、ミミオ図書館から少し離れた体育館の玄関前広場で、絵本の朗読にあわせて舞いが始まりました。最初は遠巻きに記録係として写真撮影をしていたのですが、目で追いかけている内にいつのまにか自分の体も動き出し、色々な角度からシャッターを切っていました。謎の朗読舞踏団が結成された瞬間です。告知をしながら、自分達も体の外に飛び出していたようです。

ワークショップが始まるうと言う頃には雷雨や雷がふりだした為、室内でワークショップが行われました。雨粒や雷が屋根をうつ音が不穏な空気を作っていましたが、インストラクターの奥田さんの進行のもとストレッチを始めると、皆さん伸び伸びと気持ち良さそうにしました。

伸び伸びした後は、「焚書 World of Wonder」朗読にあわせて即興の踊りが披露されました。観客の皆さんは体を伸ばした後のためか、鑑賞する集中の度合いが濃いように感じます。ワークショップなど一通り終わる頃には、ちょうど閉館の時間も近づいて来ておりミミオ図書館の最終日が終わろうとしていました。各々の体力というかエネルギーが、最後は焚書 World of Wonderに収束していくようにさえ思え、心地よい雰囲気の中で最終日を終わりました。

石巻に続き、女川でのミミオ図書館に参加して、少しずつですが東北の地に縁を感じるようになってきました。今後ともお手伝いをしていければと思っています。

(川上一紀)

---

図書館内で開かれた石巻と比べて、仮設住宅が集まる公園内の集会所で開かれた女川は少し雰囲気が違った。まずは来館者。そもそも本を読む目的で来ている人が自然な流れで訪れたのが石巻。女川はお客さんに来てもらうこと自体に、努力がいった。来館者はお年寄りと子供が多く、子供にとっては集中力を保って本を読むことが難しそうだった。私が見た範囲でよく見かけたのは音の鳴る乗り物の本を熱心に読む子だった。一方で、外につながる開放的な雰囲気の中、お年寄りが「お茶っこ」をしにきて、話をして帰ったり、というようなこともあった。石巻よりゆっくり話すことができ、女川のまちや震災、原発、若かったころのこと——をたくさん聞いたのはよかった。以前からか、震災のせいかは分からないが思索を重ねたのだろう、哲学的な言葉がたびたび聞かれた。特に私が参加した際に来てくださった年配の女性は文字のない洋書の絵本（The Arrival）を手に取り、本から触発されて自分の人生を語り、また本の世界に遊ぶという、すばらしい読み手だった。

受動的な読み方ではやや難しい本がそろっているということを考えると、ある程度対象を絞る試みに一度挑戦するのもよいかも、と思った。例えば中学校の図書室を借りて、放課後に来てもらうとか。図書委員会（図書クラブ？）の生徒に手伝ってもらって一緒に運営するのもいいかもしれない。中学生司書のおすすめの一冊を紹介すると、親近感を抱いて読んでくれるかも。小さな学校だと、その期間は図書室を地域に開放し、日中は地域の人に読みに来てもらうことも可能かもしれない。

(高橋咲子)

---

「自分に何ができるだろうか」。東日本大震災後、誰もが思っていたことだろう。私も同じだ。お金を寄付したからといって、どこでどのように使われているかがわからなかったり、物資を送ったからといってそれがどう利用されているかがわからない。わからないから自ら乗り込んでいく、そんな踏ん切りもつかず、うじうじと悩んでいた。「自分に何ができるだろうか」。

私はマスメディアにかかわる仕事をしており、鴻池朋子さんがミミオ図書館を立ち上げた際に取材でミズマアートギャラリーにお邪魔した。その時は「震災後に立ち上がったアーティストたち」といった類いの記事を書き、鴻池さんとアーティストの八谷和彦さんとの対談風景をレポートした。

本にかかわることだったらお手伝いできるだろう、と思っていた。しかし、第一回目の石巻図書館開催時には、完全に情報を漏らしており参加できなかった。取材当時に「絶対参加する」という思っていたにもかかわらず、うっかりしていた自分が恥ずかしくなった。とはいえ、当時の自分は多忙だったのかもしれないとも思いつつ、第二回目には必ず参加しようと思い、二日間参加させていただくことになった。

参加したのは4月30日～5月2日、すべて平日だったせいか人はまばらだった。夕方になると学校帰りの子どもたちで集会所はいっぱいになったが、本を手取る人たちはさほど多くはない。「本を読んで欲しい」という気持ちで少々もどかしい気持ちにもなったが、彼らが求めているのは本というより人（話し相手）なのかもしれないとも思った。それは人によっても違うだろうし、一概には言えない。

印象的だったのは、一人の女性がショーン・タンの『The Arrival』を何度も読みに来たことだった。この本に文字は一文字も書かれていない。精緻に描かれた鉛筆描きの絵のみで展開されるグラフィックノベルだ。ストーリーは一人の男がまるで宇宙のような異国へと向かい、言葉も通じないなかで仕事を絵、妻と子どもを呼び寄せるといったもの。宇宙のような、というのがポイントで、絵ではSFのように描かれているが、これはアメリカへと入植してきた移民たちの話とも考えられる。この本を読んでいた女性は「なんだか気になるのよ、この本。不思議な話ねえ」と毎日やってきては本を広げていた。見知らぬ土地へとやってきた主人公に自分を重ね合わせているのか、いろいろ思いを巡らせてはみたが、彼女がこの本の何に惹かれたのかはわからない。ただ、本と人の素晴らしい出会いを目の当たりにして、胸が熱くなった。

二日間のボランティアを終えて帰路に着く時にも、やはりこの疑問は去らない「自分に何ができるだろうか」「自分は何かできたのだろうか」。それはずっと続くのだろう。ミミオ図書館には、素晴らしい蔵書がある。それを短期間でうまく開催地の人たちに知ってもらおうよう、何か工夫する必要があるかもしれない。本の並べ方、見せ方を含め、図書館でできることをもって考えていきたい。

もうひとつ。これは図書館活動と繋がるかはわからないが、女川でストーリーテラーの方にお話を聞くことができた。地元で民話の語り部会をされている方だった。地元で昔からある民

話を語ってくれたのだが、その場でしか体験できない貴重な機会であった。そういう方たちに現地で語りの会などをやっていただくようなことができたらいいな、と思った。

事前準備や入念なリサーチ、地元の人との連携が重要であるのは言うまでもないことだが――。ミミオ図書館は、普段触れることのないアート作品や、絵本に触れられ、外部からきたボランティアによって新しい風を感じることができる場所。であるとともに、地元の人同士をつなぐ場所にもなれるといいなあ。と帰りの電車で思いを巡らせた。

(上條桂子)

---

今回WSを担当させて頂くにあたり 『もう少し先に手をのばしてみようよ』 今いる場所からももう少し先へいこうとするお手伝いをしてあげられたらと思っていました。ゲリラパフォーマンスや中庭からの告知等行いましたが、今思うと、色々な司書が入れ替わり立ち替わりくることが、場を呼吸させ、活力を与え、集会所に足を運ばなかった方々にも小さくとも刺激になっていたように思います。(ひたすらゲームをしていた男の子達もちらちらみて密かに楽しんでいた様子)

ミミオ図書館は移動する事に意義があるように思います。今回は場所を切り開く、人の心とカラダを刺激するもの。

海外では、移動遊園地というものがあるのですが、生活する場に置いて第三者の侵入、非日常の出来事。これが人の生活に何らかのリズムや活力を与えていました。今こうして振り返りながら、ゲームの世界の中で楽しむ子供達、仮のすまいに落ち着いてる方々、皆さんにもっと活力を与える事をできたのではないかと、思いめぐらしています。瓦礫の山の中でショベルの手入れをしながら「何のやる気も起こらねえ」と言っている男性「何が一番欲しいですか？」の問いに「物を置ける自分のスペース」という年配の女性日常の普通の生活をおくれるよう力になりたいと切に思いつつ、生きる活力を手渡す方法考えています。

ミミオ図書館はその全体像が紙芝居のようで、これからは、もっとその内容がもっと豊かになっていくのしょうね。それは提供する側も訪れる側も楽しい。提供する側が楽しんで活力があるときっともっと楽しい。そう思います。

(奥田純子)

<ある日のミミオ図書館>

集会所裏手の仮設に、おばあちゃんとお母さんと住んでいる小学生の男の子がいました。毎日やってくるので、私は副館長って呼んでました。

その男の子が初日の設置日に、私が絵本の原画をドイツ箱に入れていたら、私の側に寄ってきてうるうるして、男の子「何かやることない？手伝いたいんだけどー」というので、

私「じゃ、寄贈絵本を段ボールから出してよ」

でも少し経つと、また原画を設置する私に寄ってくるので、

私「絵は触っちゃダメよ、大事だからね」

男の子「ふーん、これ描いたの誰？」

慚然として私「私だよ」

男の子いきなりおののいて「ウソッ！？嘘でしょ！」

私「本当だよ」

男の子「えーうそおー」（これが少々続いて）「じゃあじゃあ証明書見せてよおー」

「えーっ、そんなものないよ。でもほんとわたし描いたの」

「うそー信じらんない、嘘だね！」

「証明書お？...、面倒だなあ名前わかればいい？」とって私はポケットをモゾモゾ...あったあったサイフの中に免許証と健康保険証と血液型証明書。

私「ほらあ、絵本の表紙の名前と一緒にしょ？読める？こ、う、の、い、け、と、も、こ」

「ほんとだっ....（絶句）」とって男の子は目を丸くし息を呑んで、しばらく私の顔をまじまじ。

私は絶句する人間を久々に見て面白くて、「でしょー、すごいでしょー」といばりました。

男の子「じゃあじゃあ、何処から描くのよ、描いてみてよ、描いたんなら描けるでしょ？端っこから描くの？線から引くの？どっから描くの？描いて描いてー描いて描いてえー」

「えーいめんどうだ、あっちへいってる」

...この会話延々と続きました。

(鴻池朋子)